

『北の海獣たち トド・アザラシ・オットセイと共存する未来へ』

和田一雄 著、彩流社、2010年

A5判、287頁+Ⅳ、DVD付録、3,800円(本体)

ISBN: 978-4-7791-1529-5

我が国の鰭脚類研究の第一人者である著者は北海道大学獣医学部卒業後、京都大学大学院理学研究科(動物学)でニホンザルの研究を行い、大阪大学医学部助手を経て、水産庁の東海区および東北区水産研究所で三陸沖のオットセイの回遊生態研究を行い、さらに京都大学霊長類研究所や東京農工大学で再びニホンザル・アカゲザルなどの霊長類を研究し、その後も道内はもとよりサハリン・千島列島・コマンドルスキー諸島などでロシア・米国などとの国際協力のもとで、トド・アザラシ・オットセイの鰭脚類やラッコの調査・研究を続けているという陸と海の哺乳類を手がけている異色の研究者である。陸・海ともに多くの著書があるが、本書は海のほうの最新の著書である。

3部10章からなる本書は、専門の鰭脚類研究者がほとんどいない我が国において、著者らが1968年に設立した海獣談話会、また帯広畜産大学の学生が中心となっているゼニガタアザラシ研究グループが公的な資金がない中で鰭脚類の保存あるいは漁師との共存を目指して奮闘してきた記録でもある。

第1部(鰭脚類の調査・研究)では、著者最初(1965年)の三陸沖でのオットセイ調査からはじまり、コマンドルスキー諸島でのオットセイのルッカリー(営巣地)調査や千島列島でのトド調査の現地レポートである。とくに政治情勢から一般人は近付き難いロシア極東の島々でのロシア研究者との現地調査や交流のようすは臨場感があり、面白い。第4章(官僚組織が研究をダメにする)では、政治や行政に翻弄される科学(調査・研究)やお役人が調査・研究をどのように考えるかを知ることができる。第2部(人と鰭脚類の関係)では、かつては商業猟獲の対象とされて激減した

オットセイや、近年の日本では漁業被害の元凶とされているトドなどの鰭脚類の資源管理について、アメリカ・カナダ・ソ連(ロシア)そして日本の調査・研究体制が述べられ、オットセイ・トド・ゼニガタアザラシによる食害の実態が示されている。鰭脚類による食害の実情把握は難しく、また鰭脚類それぞれの食性や回遊の実態の調査も不十分である。漁業者側の被害も、漁獲が十分のときは、被害額は相対的に少なく鰭脚類と共存することもありえたが、いろいろな魚種の漁獲量(存在量)の減少とともに、エサがなくなった鰭脚類が人間の分にも手(?)を出し始めたという事情があるようだ。魚は海の自然法則にしたがって生きており、それらを食べている鰭脚類もその法則に従っている。人間はそのような海の生物学的諸関係を考慮した上で、人間の取り分を決める必要がある、と著者は考える。第3部(鰭脚類と共存する未来へ)では、日本周辺の海域で繁殖するゼニガタアザラシについて一時は天然記念物指定も含めてその保護を進めてきた著者や海獣談話会、ゼニガタアザラシ研究グループの保護への模索の軌跡が綴られている。

野生動物の保全とは、人間の生産活動と野生動物の生活を調整することであるという著者の言葉には、現在大きな問題となっているエゾシカ問題が重なってくる。

最後には積丹半島のダイバーとして知られているSea Lions Clubの藤田尚夫さんとの対談「トドと海の話」と文献集で締められている。

なお、本書には藤田さん撮影の素晴らしいDVD「北の海獣たち」(25分)が付録として付いている。(在田一則)